シオン通信

大宮シオン･ルーテル教会 礼拝説教集

2007年9～10月号　第14号

日本ルーテル教団

大宮シオン・ルーテル教会

〒331-0814

さいたま市北区東大成町 1-229

phone/fax：048-663-0215

URLhttp://omiya.church.jp

Email omiya@church.jp

大宮シオン･ルーテル教会

梁　熙 梅(やん･ひめ)

みんな違ってみんないい

10月15日の月曜日に群馬にある赤城山を登りました。「山を登ること」が、忙しさの中で自分を失わないためにふさわしいということを、この度、改めて気づかされました。

というのは・・・今回の山は傾斜が厳しかったです。前登った白根山よりも一千メートルくらい低い山ですが、登るのがきつかった＾＾；しかし、きつかった分だけで自分との闘いも激しく、そんな中で「自分」という存在を客観的に見つめ直すことができました。

それは、自分にある弱さも強さも、実は、外からの働きかけによって本当の意味で用いられるものであって、一人ではどうしようもないものなのだという気づきです。紅葉が、独り手に自らを彩ることができず、季節の変化や太陽の支えがあって始めて色を変えることができるのと同じように、人間界はなおさらのことだと気づいたのでした。「当たり前のことなのに今更」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、生活の忙しさの中で見失ってしまう面が多い今を、これからもこの外からなる働きかけによって私自身生かされるものでありたい、そう思っています。赤城山の紅葉は人間の手には及ばない彩で、見事でした。

さて、山に登る一日前の10月14日の主日礼拝後、私たちの教会は臨時会員総会を開き、来年度より招聘教会(自給教会)として歩み出すことを話し合いました。教会が建てられた当初、私たちの教会が抱いたヴィジョンは、北関東に向けて宣教するセンター教会としての働きを担うことでした。当初のヴィジョンが、55 年が経った今、ここで、具体的な展開を試みることができるようになったのです。長い歩みの中で与えられた経験を生かし、それこそ外からの働きかけよって立つ教会でありたい。紅葉が様々な色によって美しいように、教会もみんなの色が違って、違う者同士が集るから美しい。神が与えられたこの美しさが、互いを敬い合う自立した一人の歩み、教会の歩みの中で生かされることを、祈っています。みなさんもお祈りの中に私たちの教会のことを覚えていただければ幸いです。

使徒パウロはこのように述べています。**「兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト･イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」**(フィリピ3:13～14)

聖書のみことば

ルカによる福音書 16:1～13

1 イエスは、弟子たちにも次のように言われた。「ある金持ちに一人の管理人がいた。この男
が主人の財産を無駄使いしていると、告げ口をする者があった。2 そこで、主人は彼を呼び
つけて言った。『お前について聞いていることがあるが、どうなのか。会計の報告を出しなさ
い。もう管理を任せておくわけにはいかない。』3 管理人は考えた。『どうしようか。主人は
わたしから管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力もないし、物乞いをするのも
恥ずかしい。4 そうだ。こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてく
れるような者たちを作ればいいのだ。』5 そこで、管理人は主人に借りのある者を一人一人呼
んで、まず最初の人に、『わたしの主人にいくら借りがあるのか』と言った。6『油百バトス』
と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。急いで、腰を掛けて、五十バトスと書
き直しなさい。』7 また別の人には、『あなたは、いくら借りがあるのか』と言った。『小麦百
コロス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。八十コロスと書き直しなさい。』
8 主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。この世の子らは、自分の仲間
に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。9 そこで、わたしは言っておくが、不正に
まみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠
の住まいに迎え入れてもらえる。10 ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。
ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。11 だから、不正にまみれた富
について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せるだろうか。12
また、他人のものについて忠実でなければ、だれがあなたがたのものを与えてくれるだろう
か。13 どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、
一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えること
はできない。」

説　教

たとえ、赤字の人生であっても

イエスさまのたとえ話の中に、ある金持ちの家の管理人の話が出されました。

「ある金持ちに一人の管理人がいた。この男が主人の財産を無駄使いしていると、告げ口する者があった。…」

ところが、ある金持ちに雇われている一人の管理人は、不正を働く人であったようです。それが雇い主にばれて、管理人は、今までの管理の決算報告を出さなければならなくなりました。今までのすべてを数字に出して報告しなければならない、深刻な時期を管理人は迎えています。

ここで一つ「管理人」について聖書が語る意味を探っていきたいと思いますが、「管理人」という聖書の語り方は、神に作られた人間像がここにあることを語る言葉です。初めに人間が造られ、神さまは作られた人間が住むところとしてエデンの園をお造りになりますが、その時、人間に果たされた初めて

の働きは、園を耕し管理することでした。そして、もう一つの創造物語であります創世記1章27節では、「産めよ、増えよ、地に満ちて地を支配せよ」と、造られた人間に向かって神さまの祝福がなされます。この二つの創造物語には、住む場所として与えられた園を耕し管理すること、子どもを産み、子孫を増やし、この地を支配しながら生きるようにされていることが、人間に果たされた使命のように語られています。しかし、「地を支配する」という言葉がどうして人間にとって祝福された言葉になるのか。私たちはここで少し疑問を持たなければなりません。ともすると、私たち人間は、神さまが「地を支配せよ」と祝福されたのだから、この地を人間が自分勝手に支配していいのだ、他の動物や植物、大地までもすべて人間のために従わせればいいのだ、という結論を出した振る舞いをしがちですが、しかし、この言葉の本当の意味はこれだけではないのです。

ヘブル語には一つの言葉にたくさんの意味が含まれます。「支配する」と訳されているこの言葉にも複数の意味があり、地を耕す、または地を管理する、または地に奉仕する、といったもっと豊かな意味が含まれている言葉なのです。このような包括的な意味を無視して、一つの言葉に限って使われるためにいろいろと誤解が生じてしまうのですが、ですから、これからはもう少し具体的に言葉を捉えるようにしたいのですが、「産めよ、増えよ、地に満ちて地を支配せよ」と語られた祝福の言葉を、「産めよ、増えよ、地に満ちて地を管理せよ、または地に奉仕せよ」という言葉に代えて理解していきたいと思います。すると、この世にあるものは、人間に管理されるためにあるものですから、そういう意味では、人間はこの地にあるすべてのものに奉仕する役目がある、ということになります。自分に従わせるのではなく、自分が他の自然、又は、自分以外のもう一人の人に奉仕する歩みで生きることが、聖書が語る人間像であるという風になります。ですから、「支配する」という言葉がここで全く反対の道を示す言葉として変身するのです。つまり、この世のもの何一つ「私のもの」として握られるものはないということに気づかされるのです。すべては神に造られたものであって、たとえ、私の血がつながっていて私がお腹を痛くして産んだ子どもであっても、私のいのちであっても、これらは神に造られたものであって、私のものではないのです。私が努力して、汗を流して設けた財産であっても、それはわたしに託されたもの、私がこの世での歩みの限り管理するように任されているものに過ぎない、ということなのです。

このような人間理解から離れて歩みだすとき、つまり、先ほどの創世記の「支配する」という言葉ばかりを強調していくときに、この世での私たちの歩みは、「私有化」を目的とする歩みへと変えられてしまうのです。隣人のものなのに私のものとして捉え、神さまのものなのに私だけが使えるものとして限ってしまうような自己欲に走るようになるのです。結局、それが争いになり、争いは戦争へとつながり、このことによって世界から平和が姿を消していくようになるのです。このような人間の姿が、今日の福音書の中の不正な管理人の姿に現れているのです。そして、そんな彼の働きが雇い主に知らされ、彼はその歩みの最終的な決算報告を出さなければならなくなりました。

管理人は、自分がやってきたことが雇い主にばれたことを知り、心の中でひとり言を言います。「どうしよう。主人が私から管理人の仕事を取り上げようとしている。どうすればいいんだろう…もう土を掘る力もない

し、物乞いをするのも恥ずかしいし…どうしよう…」

「もう土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい。」恐らく、長い間、ひょっとしたらこの人は一生涯をかけて一人の主人の下で働いてきたと思われます。ひとり言を言っている内容から、年を取っている、人生の終わりの頃である様子です。「もう土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい」。これから新たなヴィジョンを描き出して、第二の人生を歩み出す力なども残っていない、そんなときに、彼は、今までやってきたことの決算報告を出さなければならなくなったのでした。どうすればいいのだろう…とひとり言を言って悩んでいた彼に、ついに思いついたことは、今、主人に対して借金を背負っている人たちの借金額を減らしてあげることでした。つまり、そうすることによって彼は、首にされた後の自分の居場所を確保しようとしたのです。

イスラエルでは、金持ちが貧しい人にお金を貸したときには利息を取らないのが慣例です。もちろんお金だけではなく、ものを貸すときも同じように利息を取らないようにします。それはなぜかと申しますと、この世においては、飛んでいるものが貧しいものを助け、あの世ではこの世で貧しかった者が富んでいた者を助ける、という言い伝えのようなものがベースになっているようです。つまり、イエスさまが、「金持ちが天国に入ることはらくだが針の穴を通るより難しい」と言われるように、イスラエルでは、この世で金持ちだった人はあの世では貧しくされ、この世で貧しかった人はあの世で富むようになるということわざのようなものがあるようです。それで、この世で助けたものがあの世では助けられ、この世で助けられたものはあの世では助ける立場にまわる、そのために、この世での金持ちは貧しい人に金を貸すときには利息を取らないと言われていた。しかし、この管理人はちゃんと利息をも取っていたようです。貧しい人たちの置かれた立場を理解しようともせず、不正にお金を取り、それをもって無駄使いしていた。つまり、彼は、誤った働きをしていたと言うのです。人との関わり、特に貧しい人とのかかわりにおいて正しくなかった、実はそれが雇い主の名誉を損なう結果を生み出し、結局それは自分自身の人生を誤ってしまったことになるとまで彼は考えられなかったでしょうか。今、彼は、このような今までのすべての歩みの報告を出さなければならなくなりました。

私たちが、この管理人の姿に自分を重ねるなら、どのような報告を出すことができるでしょうか。私たちがこの管理人と姿を比べられたら、皆さんは、「私は少し違う」と言える方もいらっしゃるかもしれません。しかし、私自身は全く同じです。今、このときが、私の人生の歩みの最後のときだと言われたら、神さまから任せられた人生の歩みも、この世での管理職としての働きももう終わりの頃といわれて、その報告書を出すようにと言われたら、私は、何をどのように出せばいいかわかりません。本当に「どうしよう…」と、考え込むしかない、まだ赤字の歩みでしかないからです。ちゃんとしていようと思っていても、しかし、明日になっても同じ歩みを続けてしまうのです。ですから、正しい歩みをしてきた、与えられた人生やいのちを、家族との関係や隣人との関係も、この世のすべての自然との関係も、正しい関係の中で正しい管理ができたと、ですから、私の人生の決算報告は黒字になりましたと、そういう報告は、これこそ不正な報告であることを知らされるのです。むしろ、与えられている能力以上

にがんばろうと自分に無理を利かし、責任という名の下で、実は合わない条件なのに呑み込んで無理に合わせて満足しているかのように、満たされているかのように、まるで幸せであるかのように、自分自身を騙しながら歩んできたのではないだろうか。最初からボタンの位置が間違っていると知っていながらも、言えなくて、我慢して、周りに迷惑をかけたくないと思って心の病を育ててきたのではないだろうか。必死に生きようとしたら、大きな病に襲われて、病の支配下で不安と恐れに振り回され、そんな歩みではなかっただろうか。精神的な重荷に気づかされまいと、寂しさも悲しみも呑み込みながら、自分という者を具体的に見つけ出さないように誤魔化したそんな歩みではなかっただろうか。そんな私が、どうやって、「私の人生は黒字でした」と、正しい人生であったと言えるでしょうか。ひょっとしたら皆さんの中にも私と同じ思い出いらっしゃる方も居るかもしれません。実は、真っ赤かで、どこ一箇所自信を持って差し出せるような帳簿でもないのに、そんなボロボロの人生の帳簿を、しかし、確かに出さなければならない、そんなときを無明けるのだと言うこと。そして、今、管理人は、迎えているのです。じゃあ、どうしよう…土を掘るには力もないし、物乞いをするには恥ずかしいし…

不正な管理人が最終的に思いついたことは主人に対して借金を背負っている人たちの負担を軽くしてあげることでした。つまり、それは自分の居座る場所を確保するためでしたが、しかし、雇い主はこの管理人のやり方を見て褒められました。今の私たちの感覚からだったら、この管理人のようにはしないかもしれません。人生の最後に居留まる場所を確保するために老人ホームに入るか、それともどこかの施設に入るなど、そう考えるところでしょう。しかし、この管理人がやっていることは、自分の居留まる場所を探す目的ではありましたが、返済できない借金を抱え、借金の山に身動きの取れない人たちの抱えている重荷を減らしてあげることによって、彼らの心をノックすることになりました。つまり、借金のために疲れ果て、閉ざされつつある人々の心を、彼は開こうとしているのです。これは、一つの愛の表現でもあります。

韓国では中の良い夫婦のことを表すときに、たとえ豆一粒でも分け合って食べる、という表現をするときがあります。これは、とても貧しい夫婦与えられた豆のことですが、貧しいからこそ「豆一粒くらい」と思って自分のお腹だけを満たしてしまいがちなのですが、もしそうするなら、それはそれでいいでしょう。しかし、分け合ったことによってお腹は満たされないかもしれませんが、喜びは広がり、二倍三倍に増してくるのです。それは、分け合ってみて初めてわかることです。愛するということは、どれだけ小さなものであっても、誰も気づかなさそうなことであっても、「これくらいは」というふうには思わない。それは、たとえ一粒の豆くらいでしかないとしても、です。彼はこの働きかけをし始めたのでした。

つまり、以前、この管理人にとって貧しい人たちは小さい、豆粒のような人でしかありませんでした。豊かな立場からしかものを見ようとしない彼にとって、それに、社会的な力がないために言葉を発することがゆるされない貧しい人たちは、彼のような豊かさの中にいる人にとっては、豆粒のような者でしかなかったでしょう。ですから、平気で切り捨てられるのです。「これくらいは」と思うから、切り捨てても痛みを感じないのです。

なのに、そんなかかわりを平気でしてきたその人たちの心を、彼は、今、ノックしているのです。なぜ？ただ居座る場所を確保するためでしょうか。いいえ、それは、自分が、実は、この豆粒のような人たちがいなければ、本当の意味で生きることが難しい者であることを知らされたからです。お金さえあれば、ものがすべて完備されていれば生きられると思っていた。そんな自分が、しかし、人生の終わりの頃になって、雇い主から決算書を要求され、報告書を出そうとしたら、自分が切り捨ててきた人たちが、本当は自分にとってはなくてはならない人たちであったことを知らされたのです。この人たちが持っている貧しさ、弱さ、切なさ、その中でこそ、それを分かち合っていただいてこそ自分が生きられるということに、彼ははじめて気づかされたのでした。

イエスさまは、「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実であり、ごく小さなことに不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。」と、この不正な管理人のたとえを話される中で言われました。「ごく小さな事に忠実である」ということ。小さくされた人たちは、最初から小さい人たちではありません。私が、私から切り捨ててしまったために私にとって小さき人なのです。その人たち、又は他の自然、それらに忠実に生きること。「これくらいは」という思い込みで、平気で切り捨て、いらないものとし、共に生きることをしてこなかった小さきもの、又は小さな働き、しかし、大切なもの。それが、豆粒のようなものであっても、それに忠実に生きることが私に忠実に生きることであり、神さまから与えられた管理人という職に忠実であるということ。

私たちは、まさか自分が不正な管理人に自分を重ねる思いまではしないかもしれません。不正という言葉を使うほどの歩みではなかったと思うからです。しかし、今まで申しましたように、不正であるということは、自分らしさを精一杯生かしてこなかったこと、つまり、神さまに造られたときの姿で生きることを怠ってきたことを意味します。私たちは誰一人造られたままの姿で生きることはできません。ですから、私たちは、本当の意味で自分自身のために歩むことができなかった自分を今日の管理人の姿重ねるのです。そして、それゆえ、他者と共に生きることもできなかった、そんな私の赤字だらけの人生をイエスさまが担い、私のボロボロの人生決算を代わりにしてくださった。ご自分の身を投げ出して、神さまの前に、私たちの身代金を払ってくださったイエスさまのゆえに生きられるようにされている自分を見るのです。神さまの管理人として与えられた人生を無駄使いし、自分に正直に生きることを怠ってきた私が、この方に丸ごと受け止められている。私が「私として」生きられるように、神さまの礼拝に招かれ、祝福され、満たされた者として生きられるようにされているということを知る。このはかりも知れない恵みにみなさんの人生の歩みがこれからも満たされた歩みでありますように。そして、皆さんの周りの一人ひとりも皆さんによってこの恵みに預かることができますように。

祈ります。

与えられている人生の歩みが、誠実に生きようと頑張れば頑張るほど、赤字を免れないのです。そんな私たちが、あなたの恵みのうちに守られていることを感謝します。これからも、み恵みの中で歩む私たちの歩みが、あなたによって守られますように。アーメン。

聖書のみことば

ルカによる福音書 16:19～31

19「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。20 この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、21 その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。22 やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。23 そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。24 そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』25 しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。26 そればかりか、わたしたちとお前たちの間には大きな淵があって、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方に越えて来ることもできない。』27 金持ちは言った。『父よ、ではお願いです。わたしの父親の家にラザロを遣わしてください。28 わたしには兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな苦しい場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』29 しかし、アブラハムは言った。『お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』30 金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ、もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってやれば、悔い改めるでしょう。』31 アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』」

説　教

ご自分の食卓にラザロを招いて

ある金持ちの門前に重い皮膚病で苦しんでいるラザロが横たわり、金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たそうとしていました。犬もやってきてそのできものをなめるほどであったと。それからこの物語は、次のように変わっていきます。この貧しい人はついに死に、み使いたちに連れられてアブラハムのふところに送られました。ラザロは生前悪いものを受けましたが、今、ここでは慰めを受けています。このラザロの姿は、この世で、今、貧しい人たち、病気で苦しんでいる人たち、あらゆることによって虐げられている人たちが喜びを得るに違いない姿です。ラザロに自分のことを重ねてみるから、今日も、明日も続けられる貧しさと病の苦しみの中で、何とか手に入れようと足踏みしていた福音、よき知らせが、約束されていることを確信することができるのです。そして、いずれはこ

の苦しみから逃れて、慰められるときが必ずくるという希望が、実は、今、ハンセン病やエイズなど、癌やその他の病に苦しんでいる人たち、そして、貧しさの中でお腹をすかせている人たちに向けられた神さまの愛そのものでありますし、それゆえラザロの姿は福音として受け止められるのです。

ルカによる福音書の 6 章にはこのように書いてあります。「貧しい人々は幸いである。神の国はあなた方のものである。今飢えている人々は幸いである。あなたがたは満たされる。今泣いている人々は幸いである。あなたがたは笑うようになる。…喜び踊りなさい。天には大きな報いがある。」(ルカ 6：20-23)。

このみ言葉は、心の貧しい人は幸いであると語りません。そして、義に飢え乾いている人が満たされるとも語りません。実際、生活が貧しい人のことが語られていまし、今、お腹をすかしている人たちのこと、今、実際悲しみのただ中で涙を流している人たちのことが語られているのです。

つまり、富んでいる人たちから追い出され、エリート社会の犠牲になって職を失った人たち、家庭も何もかも壊されてすべて台無しにされた人たち、孤独にされ見放された人たち、不正に悩んでいる人たち、身体と魂に痛みを持っている人たち、この人たちは幸いであり、神さまの喜びが永遠にこの人々の上に与えられると語るのです。

そして、このラザロの姿の反対側にいる金持ち。ある金持ちがいた。彼はいつも紫の布や柔らかい麻布を着て、毎日贅沢に暮していた。そして、つい彼も死に、葬られた。そして、彼は、今や陰府で永遠の渇きに苦しまなければならない只中にあります。彼は地上で飽き足りていたから、今、彼は、アブラハムのふところにいるラザロを見なければならなくなりました。ラザロを通して自分の渇きがほんの少しでも癒されるようにと、切に願わなければならなくなったのです。しかし、そうすることが彼には許されません。「子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていた。」つまり、先ほどのルカ福音書の 6 章の続きでは、「富んでいるあなたがたは不幸である。あなたがたはもう慰めを受けている。今満腹している人々、あなたがたは不幸である。あなたがたは飢えるようになる。今笑っている人々は不幸である、あなたがたは悲しみ泣くようになる。」(ルカ 6：24-25)。つまり、あなた方、紫の衣を着て、ぜいたくに遊び暮している人たちは、災いだ。永遠に渇くようになるからであると。

このラザロと金持ちの、両極面に置かれている二人の物語。これは、昨日も今日も、貧しく、虐げられて、重い皮膚病に悩むラザロは幸いだ。あなたには神さまの慰めがあり、神さまの希望があり、神さまの愛があるから。しかし、昨日も今日も、贅沢に遊び暮し、名声に生きる人は、災いだと語る、この二つの物語。これは、貧しい人たちのために語られた神の喜びの福音、よき知らせなのです。

ここで、私たちは、この物語を精神的な物語として聞かないために、私たち自身を金持ちの姿においてこの物語を聞いていきたい

のです。もちろん、今ここにいる私たちは、毎日紫の衣を着て、贅沢に暮すほどの金持ちはいません。ですから、この物語が、お金をどれくらい持っているかということではなく、つまり、外面的に富む人たちが呪われた人たちであるというのを語ろうとしているのではないということに気づくために、自分を金持ちの立場におくのです。つまり、私たち自身が、自己の富に対して、そして貧しさに対してどのように対処するかということが、ここで問われている一つのポイントであることに気づきたいのです。外面的なことが問題ではなく、心の持ち方が問題であるということ。今私たちはむしろ貧しい、ラザロほどではないけれど、この金持ちから見たときにはずっと貧しい方にいると思いますが、ですから、金持ちではないとしても、その立場から物事を見るのです。または、「わたしは、財産はあるけれど心は貧しい」と言われるかもしれませんが、それこそ精神的な弁明になりかねません。本当の意味で、富の中にいても、貧しい中にいても、心が、内面が問われるということは、即外面が問われることになるからです。

というのは、貧しいラザロからは内面的なことはどこにも語られません。ラザロは、貧しさにおいて内面的に正しかったなどと、どこにも記されないのです。むしろその逆なのです。彼は、金持ちの玄関先に座り込んで、そこを離れない、それこそしつこい貧乏人でした。しかし、だからといって金持ちについては内面的なことを語っているかというと、金持ちも同じなのです。どちらの方も外面的なことだけです。つまり、内面的なこと、道徳的なことや精神的なことはどこにも記さないのです。単純に貧しさと富について語られているだけなのです。しかし、この外面的なことは、単なる外面的なことではなく、私たちが真剣に取り組まなければならない外面性なのです。私たちはここで一緒に考えてみたいのですが、もし、イエスさまにとって、このような外面的なことが大事だと思わなかったのなら、どうして病んでいる人や貧しい人たち、そして悲しんでいる人を癒したのでしょうか。そして、イエスさまが語られた言葉、目の見えない人が神の国を見るようになり、耳の聞こえない人が神の国の言葉を聞くようになると言われた、この言葉を私たちはどのように理解するべきでしょうか。目が見えないことも耳が聞こえないことも、すべて実際のことです。イエスさまはこのような、外面的に実際に見えない人が見るようになり、聞こえない人が聞こえるようになると、そして実際癒してくださいました。ですから、このことは、精神的なことではないのです。そして、これが単なる外面的なことではないという意味は、今、このわたしのこと、もしわたしに神の国の言葉が聞こえないならば、神の国が見えていないならば、わたしも実際、目が見えず、耳が聞こえない者であるということ。つまり、神の言葉を精神化してしまっているということ。これが、単なる外面的なことではないということなのです。今日の二人の、ラザロと金持ちの物語はこれを語ろうとしているのです。

ですから、聖書は、ラザロと金持ちの内

面をどこにも記さないのですが、二人は、外面において大きな差がありました。この世にいるときも、死んでからも、アブラハムの言葉を借りるならば、二人の間には大きな淵があるほどの差がありました。この大きな淵とは天と地が離れているくらいの差です。しかし、天と地が離れているような大きな差をもっている二人にたった一つだけ共通することがありました。それは、二人が、死ぬべき人間であると言うことなのです。死において二人は共通しているのです。貧乏人で、できものだらけで、犬になめられながら生きるしかなかったラザロも、毎日紫の衣を着て贅沢に暮していた金持ちも、死ぬべき人間であった。死において金持ちは、もう新しいところでは富んでおりません。貧しいラザロももう貧しくありません。しかし、二人が死んでからそこで新しいことが起きるのです。もはや死の力に支配されない、新しい世界がそこには広がっているのです。

つまり、人は、この世での歩みが、死の力に支配されていることを知らなければならない、この世にあるものはいずれかの時には必ず亡くなるもの、死するもの、自分自身も含めて朽ち行くものであることに気づかなければならないということ。わたしたち皆は同じく死ななければならない者であり、共にあの世に生きるべき者であるから、ですから、金持ちは、ラザロが自分と一緒に死と審判を分かつ兄弟であることに気づくべきでした。自分の背後に、そしてラザロの背後に無限があり、永遠があって、今は聞こえもせず、見ることもできなくとも、紫の衣とラザロの裸の身体のもとに隠されている、いのちの源となる方を見るべきでした。いずれかのときはその方が支配する世界が現実となっていくことに、金持ちは、気づくべきだったのです。

つまり、この隠されている方の現実とは、今私たちが聞いています神の言葉、礼拝の中の説教を通して語られる神の言葉のことです。今日の聖書では、この世に生きる金持ちの兄弟たちはモーセと預言者がいるからそれに聞けばいいといわれていますが、モーセと預言者とは律法と福音のことです。つまり、神の言葉、聖書全体を語っているのです。それが説教の中で語られているのに、耳を傾けないのなら、「たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れたりはしないだろう。」つまり、この世、死の支配化にあるこの世に生きる彼ら、金持ちの兄弟たちは、以前、金持ちがそうであったように、門前のラザロが永遠のラザロにあることに抵抗し、むしろ神に見捨てられた者であると思い切って自分たちから切り捨てて、ラザロの背後にある永遠のいのちを、理解しようとしないであろうということ。

さて、そうするならば、ラザロとは誰のことでしょうか。もちろん、貧しい人のことです。時には愚かで、恥知らず、貧しさのただ中に置かれた者であり、知ると知らざるとに関わらず、食卓から落ちるパン屑を熱心に乞い求める、苦難にとらわれた兄弟のことであります。つまり、卑しい人々の姿で、私たちに会われる十字架につけられたキリストご自身なのです。

そして、ラザロとは誰だろうかともう一度問うならば、卑しい姿で十字架につけられたキリストが出会ってくださるがゆえに、私たち一人ひとりが、神の前にいるラザロなのです。十字架のキリスト、ただただこの方一人のゆえにわたしたちは、神の恵みに生きる者とされ、神の慰めを受ける者とされました。ですから、私たちは、今神の前のラザロなのです。

そんな私たちは、しかし、金持ちの立場に居続けようとする自分を見なければなりません。実際、紫の衣を着てはいないのですが、神のことばを精神化してしまうがために、裸で、醜い身体で、お腹をすかせている隣人の側を何度素通りしてきたのか…金持ちが、ラザロの背後に神ご自身が、キリストが立っておられること、そして、永遠の喜びの福音があることを見てこなかったように、私たちも、悲しみの内にある貧しいラザロの背後に、ラザロをご自身の食卓に招いておられ、ラザロを祝福しておられるキリストを見ようともしないできた。そんなわたしたちに、ラザロを招いておられるキリストが見えたとき、わたしたちに、ラザロの背後にある永遠のいのちの持ち主が祝福し続けておられるその姿を見ることができたとき、はじめて、わたしたちは、自分が、実は貧しいラザロであり、自分の中におられる十字架の主を見ることができるのでしょう。

祈ります。

主はラザロをご自分の食卓へ招き、共に食し、ラザロの飢えが満たされるように祝福しておられます。私たちも、主に招かれているラザロとなって、常にあなたの祝福の中で歩むことができますように。主がくださる新しい命をいただいて、謙虚な歩みができますように導いてください。主の名によっていのります。

【10～11 月礼拝予定】

【主日礼拝】毎週日曜日 朝 10 時 30 分～

10 月 7 日(日)　聖霊降臨後第 19 主日 聖　書：ハバクク 2: 1～4、Ⅱテモテ 1：3-14、ルカ 17：1-10 主　題：取るに足りないわたしであっても
10 月 14 日(日)　聖霊降臨後第 20 主日 聖　書：列王記下 5：1-14、Ⅱテモテ 2：8-13、ルカ 17：11-19 主　題：　他の九人はどこにいるのか
10 月 21 日(日)　聖霊降臨後第 21 主日 聖　書：創世記 32：23-31、Ⅱテモテ 3：14-4：5、ルカ 18: 1-8 主　題：神の祈りに生かされて
10 月 28 日(日)　聖霊降臨後第 22 主日 聖　書：申命記 10：12-22、Ⅱテモテ 4：6-18、ルカ 18：9-14 主　題：ふさわしくない者なのに
11 月 4 日(日)　聖霊降臨後第 23 主日（全聖徒主日） 聖　書：出エジプト 34:4～9、Ⅱテサロニケ 1：1-12、ルカ 19：1-10 主　題：見えない輪
11 月 11 日(日)　聖霊降臨後第 24 主日 聖　書：歴代誌上 29：10-13、Ⅱテサロニケ 19：11-27、ルカ 19：11-27 主　題：ームナの所有者
11 月 18 日(日)　聖霊降臨後第 25 主日（収穫･成長感謝合同礼拝） 聖　書：マラキ 3：19-20、ユダ 17-25、ルカ 20: 27-40 主　題：すべての者は神によって生きる
11 月 25 日(日)　聖霊降臨後最終主日 聖　書：イザヤ 52：1-6、Ⅰコリント 15：54-58、ルカ 21：5-19 主　題：いのちを勝ち取る

（説教主題は今のところの予定です。変更になる場合もあります。）

【その他の集会】

- 第一・三水曜日午前 11 時よりヨハネによる福音書を女性の視点から読みます。
- 第二・四水曜日午後７時より夕礼拝を行い、旧約聖書から説教をききます。
- 毎週金曜日午後 3 時より女性の視点による聖書の学びを行なっています。特に英語学校生徒を中心に、英語学校授業スケジュールに合わせて行なっております。
- その他、随時(希望にあわせて)キリスト教入門講座・面談など行なわれています。